

Title	幕藩制社会の展開と米穀市場
Author(s)	本城, 正徳
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/38503">https://hdl.handle.net/11094/38503</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	ほんじょうまさのり 本 城 正 徳
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 1 1 1 4 2 号
学位授与年月日	平成 6 年 3 月 1 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	幕藩制社会の展開と米穀市場
論文審査委員	(主査) 教授 脇田 修
	(副査) 教授 芝原 拓自 助教授 平 雅行

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、主として米穀市場の分析をおこない、それを通して幕藩制社会の特質と展開を明らかにしようとしたもので、序章・本論 7 章、780 枚 (400 字) の労作である。

序章では、米穀市場に関する研究史を検討したのち、従来、不十分であった近世中後期の米穀市場変動の全体像を明らかにするため、とくにほとんど研究がなされていない米穀需要のあり方を中心に分析するとしている。

第一章は「農村部飯米消費市場の形成・拡大と特質」と題して、畿内と瀬戸内海沿岸部における飯米消費市場の成立状況を検討している。まず元禄～享保期以降、畿内農村では村内に米穀小売商 (搗米屋) が成立しており、米穀販売がなされていることを明らかにした。また、そこでは米穀を購入する二つの階層が存在するとして、米穀をつくらず主に木綿・青物などの栽培をおこなう商品生産農家 (第 1 類型) と、下層の者で日用などにより生計をたてる非農業民 (第 2 類型) のあることを指摘した。またこのような状況は、18 世紀以降の瀬戸内海地域の農村にも認められるとしている。しかもこれらの地域では、飯米を近隣のみを求めるのではなく、他国米に依存する状況も見られた。また幕末期にかけて、第 2 類型の比重が高まり、瀬戸内海地域の発展が著しい、などの変化を内在しつつ、全体として米穀市場の規模拡大があったことを指摘した。

第二章「年貢買納制の変容と買納米需要」では、第一章でとりあげた地域を中心に、米を購入して年貢を納める買納制がみられることを明かにした。買納制は、特別の災害や山間・畑地の多い立地条件などによって年貢米の不足が来たさい、幕府側の許可をえて、品質を落とさず、かつ同地域の米を購入して納めることを条件に、制度的にも認められていたものである。しかし畿内では田方綿作が盛んなため、年貢米が不足し、それを他国米の買納によって解決することがみられた。これは幕府の趣旨に反しており、たびたび禁令がだされている。また畿内や瀬戸内海の私領でも同様のことがおこなわれ、領主によっては他国米を禁じている例もみられた。結局、綿作などの商品生産の発展によって非合法的な年貢買納がなされ、他国米を含む米穀需要も多く、それは幕末期に至るまで広範におこなわれたのであった。

第三章「在払制の展開」では、前記のような米穀需要の存在を前提にして、畿内地域にみられる年貢米在払制と地域的米穀市場についてとりあげている。和泉の伯太藩渡辺氏の例では、特定の豪農などに販売する制度ができており、年度によって変動があるものの、年貢米のうちで、それはかなりの比重を占めていた。そして 18 世紀には銀納率がふえ、在払いは減少していった。また販売先は、大坂・堺や富田林などの在郷町とともに農村部が多く、年度によって

は50パーセントにも及んでいることを指摘している。販売先には酒造業が考えられるが、農村部にも大坂の市場価格に近い高価格で販売していることは、第一章で述べた飯米需要層の存在なしではありえないとする。また平野郷などを領する高崎藩松平氏の例でも、同様の状況が見られるとした。

第四章「中央米穀市場の変質的拡大」では、中央米穀市場である大坂堂島米市場の動向をとりあげている。大坂が中央米穀市場としての地位を確立するのは、17世紀後半以降のことであり、入津米高は100万石の水準に達し、文政期には200万石を超えてピークに達する。この入津米は、西日本・東北・北陸に広がる地域から送られたもので、多くは諸藩の蔵米であり、約4分の1程度の納屋米が存在する。そして蔵米は蔵屋敷より堂島米市場で売られ、堂島米問屋・仲買によって独占的に購入された。また納屋米は直接市中間屋が取り扱った。この米の販売先は、大阪市中ついで京・伏見・堺・尼崎などの諸都市、西宮・平野郷・八尾などの在郷町、大阪三郷町続の諸村、灘目を含む周辺農村であり、さらに江戸などへの積出しもおこなったとする。かくして大坂米穀市場の質的發展は、農民米つまり納屋米の増大を含む入津米の増大と、農村地域への米逆流といった状況によって示されているとした。

ついでこの内容を米穀需要の観点から詳細に検討している。とくに都市・在郷町では大坂入津米に依存する比重が高いこと、また平野郷での分析によれば、大坂米市場から肥後米が流入しており、地米価格より高値で販売されているという状況を明らかにして、在郷町における米穀需要の高さを指摘している。また年貢買納のため、幕領村々では市中買付をおこなっている事実も明らかにしている。このような広範な米穀需要を背景にして、大坂米穀市場は成立していたのであった。

ついで農村への米の逆流現象について検討し、それは在方における米穀需要とともに、領主による廻米強制があることを重視しなければならないとする。畿内・瀬戸内海地域では、領主財政の必要から大坂への廻米が強制され、そのため領内における米供給の絶対量が減少したこと、それが米価の上昇をもたらし、また逆に大坂入津米＝他国米への依存を高めたことを指摘する。

第五章では「大坂入津米集散状況の数量的分析」をおこなっている。この問題については先行研究が存在するが、ここでは新史料を含めて、現在知られている史料の性格を検討した上で、その実態を明らかにしている。中後期には大坂への入津米は、100万石以上の水準を維持し、凶年においても米価上昇のため、かえって大坂への流入がおこなわれた。また文化・文政期には、新田開発・農業技術の発展などにより入津米が増加し、それは従来想定されていた数量より大きく、250万～300万石に達していたのは、とくに藩財政と大坂金融資本との関係から廻米強制がなされたためであると述べている。またこの時期には、天明・寛政期を画期として北国米の比重が下がるから、入津米の増加は西国米の供給増によっていると述べている。

また大坂からの販売状況について、安永・天明期には市外への販売量は、年間23万～37万石（総入津米量の23～34パーセント）となっている。また宝暦～寛政期の畿外への下り積米は、年間20～30万俵代であり、化政期にもそれは持続している。しかし天保期頃には後者の比重は相対的に低下するとしている。

第六章「納屋米集散市場の発展と構造」では、納屋米市場の発展をとりあげる。18世紀後半には大坂市場の圧倒的優位のもとであるが、堺・兵庫に納屋米の集散がなされていたが、19世紀になると兵庫・堺また各浦の米市場が発達し、大坂の地位は相対的に低下する。これは農民相互間における米の全国流通の進展と、諸藩が領内外の存方需要へ年貢米を直接投下したためであるとする。またそれには大坂金融資本が新たな状況に対応して、藩政策の転換を支持したためであった。

第七章は「幕末期における幕府市場政策の特質と都市問題」として、幕府政策の検討をおこなう。まず近世中期においては、幕府は領主経済の再生産を基本とする中央米穀市場の維持と米価引上げを意図していた。この基調は変わらないが、やがて都市下層民の広範な滞留などの都市問題によって、市中飯米確保を目的とする傾向があらわれ、他所売を制限し、米価抑制をはかるようになった。これは中央市場維持・回復をはかる政策と矛盾すると述べている。

## 論文審査の結果の要旨

近世米穀市場についての研究は、中後期の中央市場である大坂堂島米市場についての研究を中心に、入津米の数量

や米価などについて、時期的変動を含めて、詳細な研究がなされている。また各藩における貢租米の流通・販売や藩財政に占める比重などについても、多くの分析がなされた。しかし本論文のように、米穀需要の観点から、全体として米穀市場の動向を検討した研究はなかった。このような視角から近世米穀市場の動向を明らかにして、新たな局面を開き、多くの新見解を加えたところに、本論文の独創性があり、大きな功績があると考えられる。

その主要な論点について述べると、まず木綿などの商品作物を栽培する畿内・瀬戸内海地域では、農村内部において米穀需要が広範に存在することを明らかにした。従来、近世農村は主穀生産をおこない自給自足経済を営むというイメージが強く、元禄期以降における商品経済の浸透という事実ですら否定的な見方が強かった。まして農村部において酒造米以外の米需要があり、大坂市場から農村へ米穀が販売されるといった現象は考えられもしなかったといっていた。

本論文では、農村内部の米小売商の存在などから米穀需要がみられることを想定し、現実に米穀が販売されており、とくに大坂市場から在方へ米が逆流していることを明らかにした。そして米穀を購入するのは、木綿などの商品生産をおこなう中堅の農家と日用などで生計をたてている非農業下層民の二つの階層であると述べ、後期になるにつれて後者の比重が高くなるなど、その変動をも追求している。

ついで近世社会の基本的な収取体制である米納年貢制について、これも綿作など商品生産が盛んな地域では、近在の産米だけではなく、他国米をも購入して年貢米とする年貢買納がおこなわれたことを指摘している。生産物地代というが、ここではその形骸化が進行していることを指摘したのであった。これもまたすぐれた成果といえよう。

また大坂堂島米市場の実態についても、需要面からする米の販売・流通をふまえて、改めて分析をおこなった。ここでは史料の検討をふまえて、数量的な確定をおこなったこと、また在方での需要の大きさから、大坂から逆流した米が、大坂並の高価格で販売されていることなどを指摘している。

このように本論文は、需要という視角から、近世米穀市場の動向を明らかにして、多くの新見解を提出したものであり、また従来の研究水準を大きくひきあげた画期的な成果と評価できる。それは膨大な史料をふまえた実証的研究であり、また従来の研究を需要の観点から再構成することにも成功している。今後は、本論文において米穀市場の問題を語ることはできないであろう。なお、これらの事実、旧来の近世封建社会像とくに中後期における社会像を考え直すための重要な素材を提供していると考えられる。

米穀市場をめぐる幕藩の利害関係や幕府の市場政策については、改めて本格的に取り組んでほしいと考えるし、また都市下層民の動向についても、やや手薄な感があるが、これらは本論文の成果を損ねるものではない。本委員会は、本論文を博士の学位に十分な価値があるものと認定するものである。